ならぬ。故に一日壹圓の勞働といふ事は、畢竟、勞働者が一個一日壹圓といふ事に外ならぬのである。工場内に於ける勞働者は最早や人格を有しない商品、人格を認めない奴隷と何等異るがない。

何故ならば勞働者が『俺は雇主に唯俺の勞力だけ賣つたのだ、俺は靈まで賣つては居らぬから、如何な信仰を抱いても、思想を持つてもそれは雇主の知つたことじやない』と力んでもそれは駄目である。若し『お前は基督教を信じてゐるから怪しからぬ、即刻出て行け』と雇主に云はれたら、勞働者は直ちに出て行かねばならぬ。唯實際上に於て、かゝる事まで干渉壓迫をせないのは、勞働者が基督教を信じても工場の能率に影響を及ぼさない。儲かる上に邪魔をしないと考へるからである。だから若し勞働者の抱いてゐる思想が假令正しいことであつても、若し資本家の感情を害し、逆鱗に觸れるならば忽ち解雇の嚴命は彼の頭上に下るであらう。私共は此の實例を幾許でも見聞して居る。即ち或る團體に加盟したるがために解雇の厄に遇つた私共の同志が數へ盡せぬ程澤山あるではないか。

これを稱して賃銀奴隷制度といふ。奴隷といふ文字に何の不都合があらう。而して若し勞働者が飽くまでも自己の自由に生き樣とすれば、忽ち職業に離れ――（勞働者の思想までも征服し、束縛しやうとする資本家は往々『黑表』を作つて勞働者を威嚇することさへある）――餓に苦しまねばならぬ。餓死か奴隷制か、今日の勞働者